

東西の美術における家庭、女性、子供の表象

Representations of Home, Women and Children in the Eastern and Western Arts

中村 俊春（京都大学大学院文学研究科 教授）

【国内参加者】

高 嶋 慈（京都大学大学院文学研究科 博士後期課程）

鄭 賢 娥（京都大学大学院文学研究科 博士後期課程）

中田明日佳（京都大学大学院文学研究科 博士後期課程）

根立 研介（京都大学大学院文学研究科 教授）

平川 佳世（京都大学大学院文学研究科 准教授）

福士 雄也（静岡県立美術館 学芸員）

宮崎 もも（大和文華館 学芸員）

矢頭英理子（京都大学大学院文学研究科 博士後期課程）

吉 岡 洋（京都大学大学院文学研究科 教授）

【海外参加者】

李 淑 珠（明志科技大学 助理教授）

Hillary Pederson（カンザス大学博士課程修了 Ph.D.候補）

Mirjam Neumeister（バイエルン州立絵画収集所 学芸員）

【ねらいと目的】

近年、美術史研究においては、家庭、子供、女性の表象に注目した研究が盛んになってきている。たとえば、人々の日常的な暮らしを描いた風俗画が大流行した 17 世紀のオランダ美術研究においては、長年、日常的な事物を写實的に描いた作品中にも種々の象徴的な意味が込められていることを探る図像解釈が主流となっていた。だが、1990 年代以降、カルヴィニズムを核とする社会制度や、男女の役割分担、子供の教育問題、使用人の仕事など、当時の家庭のシステムに注目した研究が行われ、風俗画はオランダ社会の道德観の反映として読み解かれるようになった。同様に、日本美術史研究においても時代の家族制度や女性観などを十分に考慮することの重要性が認識され、たとえば、単に女性の魅力、美しさを描くことを意図した作品として片付けられることの多かった「美人画」に関しても、社会が強制・要求・期待する女性像の表象として考察されるようになってきた。本研究の目的は、さまざまな時代および地域を専門とする研究者が集まって、近世以降、現代に至るまでの、ヨーロッパおよびアジアで制作された、家庭、子供、主婦などの描き出したさまざまな作品を取り上げて、この種の主題がどのように表現されてきたのかを探ることにある。さらに、それを通じて、私的世界の表象に、時代および地域の公的価値観がどのように浸透しているのかを解明する。

【活動の記録】

<シンポジウム・講演会・研究会等>

1. 国際シンポジウム「アジアの近代美術に見る親密圏の表象」
主催：国際共同研究「東西の美術における家庭、女性、子供の表象」および京都美学美術史学研究会（共催）
日時：2008年12月13日（土）15:30～18:00
会場：京都大学文学部新館 第6講義室
研究発表：
矢頭英理子（京都大学博士後期課程）「大正末から昭和初期における女性像に関して」
李淑珠（明志科技大学准教授）「台湾近代美術における子供の描写」
金伊順（弘益大学教授）
「1950年代の韓国における家族のイメージ — 安息のメタファーとしての家族」
2. 講演会「家庭こそメディアの場所である？ — 家庭内メディアの考古学」
主催：国際共同研究「東西の美術における家庭、女性、子供の表象」
日時：2008年12月19日（金）15:00～17:00
会場：京都大学文学部新館第2講義室
講演者：エルキ・フータモ（カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授）
3. シンポジウム『美術に見る親密なるものの表象』
主催：京都大学グローバルCOEプログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」および美術史学会（共催）
日時：2009年5月23日（土）13:30～17:40
会場：京都大学百周年時計台記念館百周年記念ホール
研究発表：
根立研介（京都大学教授）「趣旨説明」
安田篤生（愛知教育大学准教授）「伊勢物語絵に見る「男」と「女」 — 二条の後の場合」
ジョン・ラフマン（アイルランド国立大学ダブリン校上級講師）
「家庭の至福 — 17世紀オランダ風俗画の中の家庭と家族のイメージ」
田島達也（京都市立芸術大学准教授）
「「無邪気な子供たち」を見る絵 — 唐子遊図をめぐる」
ミルヤム・ノイマイスター（バイエルン州立絵画収集所学芸員）
「変化する子供のイメージ — ネーデルラント美術における子供の肖像画とその影響」
コメント1：小林頼子（目白大学教授）
コメント2：中谷伸生（関西大学教授）
4. 研究会『東西の近世美術と親密圏の表象』
主催：国際共同研究「東西の美術における家庭、女性、子供の表象」

日時：2009年8月1日（土）15:00～18:00

会場：京都大学文学部

研究発表：

宮崎もも（大和文華館学芸員）「子供と行事絵 ― ひな祭りを中心に」

平川佳世（京都大学准教授）「ルーカス・クラナハ作《聖氏族祭壇画》をめぐって」

<調査等>

1. 実施者：鄭賢娥、高嶋慈、矢頭英理子

日時：10月18日～24日

場所：釜山ビエンナーレ（韓国・釜山）、光州ビエンナーレ（韓国・光州）、ソウルメディアアートビエンナーレ（韓国・ソウル）

実施内容：親密圏を描いたアジアの近・現代美術作品の実見および資料収集

2. 実施者：鄭賢娥

日時：10月25日～11月1日

場所：朴寿根美術館（原道ヤング市）

実施内容：親密圏と公共圏に関わる美術作品に関する資料収集

3. 実施者：高嶋慈

日時：11月20日～24日

場所：横浜トリエンナーレ（神奈川県横浜市）、東京国立近代美術館（東京都千代田区）、東京都現代美術館（東京都江東区）、東京都写真美術館（東京都目黒区）、目黒区美術館（東京都目黒区）、森美術館（東京都港区）、原美術館（東京都品川区）

実施内容：親密圏を描いた近・現代美術作品の実見および資料収集

4. 実施者：Hillary Pederson

日時：12月28日～1月4日

場所：カウンティ美術館（ロサンゼルス）、アジア美術館（サンフランシスコ）、アジア美術館（シアトル）

実施内容：家族、友情、そして愛情に関する美術作品の調査と図像収集および学芸員との意見交換

5. 実施者：吉岡洋

日時：1月20日～30日

場所：カリフォルニア大学バークレー校、サンフランシスコ・アート・インスティテュート、カリフォルニア大学ロサンゼルス校

実施内容：研究打合せ（カリフォルニア大学バークレー校（ジェンダー研究））および、「メディアと親密性」に関する討論会（サンフランシスコ・アート・インスティテュート、カリフォルニア大学ロサンゼルス校（デザイン・メディアアート））

6. 実施者：鄭賢娥

日時：1月27日～30日

場所：福岡市立美術館、福岡市立図書館、福岡アジア美術館（以上、福岡市）

実施内容：「九州派展覧会」（1988年開催）に関する資料調査（福岡市立美術館、福岡市立図書館）および近現代アジア美術における親密圏の表象に関する画像収集（福岡アジア美術館）

7. 実施者：矢頭英理子

日時：2月19日～2月22日

場所：国立国会図書館、東京国立近代美術館、大倉集古館、泉屋博古館分館（以上、東京都23区）

実施内容：大正・昭和期の日本美術における親密圏に関わる資料および画像収集

【成果の概要】

2008年度～2009年度の2年間に、国際シンポジウム2回（うち1回は美術史学会と共催）、講演会1回、研究会1回を開催するなどして、大別して、3つの時代と地域の美術作品に見られる親密圏の表象をめぐって、以下のような共同研究を行った。

1. 日本近世美術－日本の近代以前の美術において、家族の肖像はほとんど描かれることがなかった。しかし、浮世絵には子供や母子を主題とした作品が数多く知られているし、男女の恋愛を主題とした大和絵の作品も多い。また、雛祭りのような節句も江戸時代には家庭の行事として定着し、その様子を描いた絵画も流行した。これらの作品は、男女の役割分担や恋愛、理想の家庭像などに関する当時の思想をどのように映し出しているのかという点に着目して研究を進めた。

2. 西洋近世美術－西洋では、他国に先駆けて君主制を廃した17世紀オランダにおいて、市民の日常の暮らしを描いた風俗画が大流行した。本研究では、それらの作品に描かれた親密圏の表象に注目しつつ、特に家庭の表され方の諸特徴を考察した。また、子供が如何に描かれてきたのかという視点から、ネーデルラントおよびイギリス美術の作例を取り上げ、日本の作例との比較の可能性を探った。

3. 近現代美術－近現代美術において家族を描いた作例は多い。本研究では、特に、戦時下の社会において家庭や女性がどのように描かれてきたのかを探るという視点から、日本占領下の台湾および朝鮮戦争時代の韓国の画家たちの作品を中心に研究を進め、政治情勢の家庭像への影響を探った。

以上の研究成果として、個別の問題を扱った論文9篇と美術と親密圏の問題を論じた総論、および、大学院生の研究成果報告を収めた最終成果報告書を作成した。また、個別の問題を扱った論文9篇と美術と親密圏の問題を論じた総論については、別途、論文集として刊行予定である。



階



・フマン



